

令和 6 年 6 月 24 日現在

機関番号：12101

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2023

課題番号：18K12485

研究課題名（和文）ローマ教皇ピウス11世関連新史料に基づくファシズム・カトリック関係史研究

研究課題名（英文）Research on the relationship between fascist powers and Holy See using new historical materials related to Pope Pius XI

研究代表者

新谷 崇 (ARAYA, Takashi)

茨城大学・教育学部・助教

研究者番号：30755517

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：ヴァチカンが2006年に新規公開したピウス11世時代（1922～1939）の文書を用いて、教皇聖座がファシズム勢力に対して取った戦略、交渉を考察し、公的場面での発言や行動の意味、背景を明らかにした。そして、戦間期の国際関係、とりわけファシズム勢力のネットワーク、枢軸陣営が形成されたことにおいて教皇聖座が果たした役割の一端を把握した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

研究意義は三つある。一つ目はヴァチカンの新規公開史料の近現代史における利用可能性を明らかにできたこと、二つ目は「協力」「敵対」の二項対立で単純化され語られてきたファシズム勢力との関係をより多面的に捉えられたこと、三つ目は個々の体制や運動の分析に陥りがちなファシズム、枢軸の研究にカトリック教会との関わりから総合的、比較史的に把握する視座を提供できたこと、である。

研究成果の概要（英文）：Using the Vatican's newly released documents related to pope Pius XI (1922-1939), this research examines the Vatican's strategies and negotiations with the fascist powers, and clarified the meaning and background of its statements and actions on public occasions. The study also points out some of the roles played by Holy See in international relations during the interwar period, particularly in the formation of the Axis, a network of fascist powers.

研究分野：イタリア近現代史

キーワード：ファシズム カトリック教会 ムッソリーニ ピウス11世 ピウス12世

1. 研究開始当初の背景

ピウス 11 世 (在位: 1922 ~ 1939) が教皇の座にあったのは、第一次世界大戦と世界恐慌が各国の政治と社会を不安定化させていた時代であった。「ファシズム」を標榜、親近感を示す運動、政党が数多く勃興し、そうした性格を有する諸体制は正統性と国際的信認を必要としていた。一方で、ロシア革命以降、世界は共産主義の浸透に直面していた。宗教を否定し、宗教教育や教会財産を廃止しようとする無神論に立つ共産主義は、カトリック教会にとって脅威であった。宗教活動を安心して遂行できる社会秩序をもたらす、共産主義に対抗できる新たな政治権力を教会側は求めていた。つまり反共という共通利害がカトリック教会とファシズム勢力には存在していた。しかし、利害の一致もつかの間、各ファシズム勢力と教会の関係は対立を抱えることになる。そもそもファシズムを標榜する体制、政治思想は国民精神の総動員、国家の全体主義化を目指す以上、普遍の立場で人々にカトリック信仰を広めようとする教会とは相容れない性質を内在していたといえる。両者の不一致については、たとえばイタリアでは、ラテラーノ協定の数年後には教育分野で深刻な衝突が始まり、さらにはユダヤ人を対象とした人種主義を巡る対立としても露になった。

カトリック教会とファシズム勢力の関係性は、戦後のイデオロギー対立を色濃く反映させながら、長らく「協力」「敵対」の二項対立図式に単純化され、語られてきた。たしかにファシズム体制との関係は、ファシズムとその戦禍への反省に立つ戦後世界において、「政治」「倫理」の問題から逃れ難い。実際、ユダヤ人迫害などでカトリック教会が取った行動は政治的争点であり続けている。しかし、本来カトリック教会とファシズム勢力は、様々な利害を抱え、激しくぶつかり合っていた。近年の歴史研究では固定化した政治的立場から距離を取り従来の二項対立図式を乗り越える模索が続いてきた。

教会とファシズム勢力の間には共通利害、協力、対立が並存し、絡み合っていたが、各自の思惑、水面下の交渉などは、公的な場面での発言や行動として、いわば表面に現れる現象だけ見ていては分からない。単純な協力・対立の議論に陥らないよう、史料に基づきながら事実を積み上げることで、政治化された過去を把握し直す必要があるのではないかと考えた。ヴァティカンがファシズム勢力に対してどのような認識を有していたのか、その戦略を詳細に検討し、ヴァティカンの動向を国際関係の再編の中に位置づけることで、新たな歴史像を描き出せるのではないかと考えた。

以上の問題意識をもたらす、また、研究に着手しようと思うに至った大きな動機としては、ローマ教皇庁が 2006 年、戦間期に教皇の座にあったピウス 11 世の文書群を公開したことにある。1939 年 2 月という第二次世界大戦前夜までの文書にアクセスできるようになったことで、現代史の諸問題を解明する可能性が広がった。文書の公開以来、世界中の研究者がヴァティカンを訪れ、多くの成果が公開されてきた。本研究を開始しようとした当時、未調査の文書が数多く残されていたのにくわえ、ドイツなど個別の国とヴァティカンの関係研究は出されていたもののファシズムの国際ネットワークや枢軸勢力との関わりに着目した研究は見当たらなかった。そこで、新史料の調査をベースにすることで、この分野の研究を進展させられる余地があると見込んだ。

2. 研究の目的

(1) ヴァティカンが新規公開したピウス 11 世時代 (1922 ~ 1939) の文書を用いて、ヴァティカンがファシズム勢力に対して取った戦略、交渉を考察し、公的場面での発言や行動の意味、背景を明らかにする。

(2) 戦間期および第二次世界大戦中の国際関係、とりわけファシズム勢力のネットワーク、枢軸陣営が形成されたことにおいてヴァティカンが果たした役割は何かを明らかにする。

(3) 個々の体制や運動の分析に陥りがちなファシズム、枢軸国の研究をカトリック教会との関わりから再構成し、比較史を可能にする新たな視座を提供する。

3. 研究の方法

ヴァティカンでのピウス 11 世時代の新規公開文書の調査と、そこで得た史料の分析が、本研究の根幹部分を構成する。調査を実施する主な文書館は以下の 2 カ所である。

- ・ヴァティカン秘蔵文書館 (教皇庁中枢の文書を保管。教皇の立場を把握できる)
- ・教皇庁対外関係文書館 (日本、イタリアなど 53 の地域に分類。各国との交渉過程を把握できる)

入手した新規公開文書の内容を多角的に理解するため、カトリック教会の上層部の公的な発言、行動との突き合せ作業を行う。主に刊行物史料からヴァティカン側の動向を把握する。

- ・D. Bertetto (a cura di), *Discorsi di Pio XI*, Città del Vaticano, Libreria Editrice Vaticana, 1985 (ピウス 11 世の発言集)

・ *L'Osservatore Romano* (教皇庁の実質的機関紙)

・ *Civiltà Cattolica* (イタリアのイエズス会発行の隔週誌)

さらに、ファシズム体制側の対応、方針なども突き合わせる。ムッソリーニの発言、著作集を分析するとともに、イタリア側の公文書館でも当該時期の文書を精査し、ファシズム勢力とカトリック教会の相克を把握する。国立中央文書館では、ムッソリーニを首班とするファシスト政権の政治決定を考えるうえで重要な閣議と、ムッソリーニと主要人物とのやり取りを把握できる総統特別秘書官房の文書を、主に調査する。ムッソリーニの公的場面での行動や主張の把握については以下の出版物を活用する。

・ B. Mussolini, *Scritti e discorsi di Benito Mussolini*, 13VOLL, Milano, U. Hoepli, 1934-1940 (ファシズム期に出版されたムッソリーニの著作、演説集)

・ Edoardo e Duilio Susmel (a cura di), *Opera omnia di Benito Mussolini*, 44VOLL, Roma, La fenice, 1951-1980 (戦後に出版されたムッソリーニの著作、演説集)

4. 研究成果

主要な成果は、(1) ヴァチカンの文書の公開状況を把握できたこと、(2) 教皇を中心とするカトリック教会中枢がイタリアのムッソリーニ政権をはじめとするファシズム勢力、枢軸国に対して取った方針、交渉の一端を明らかにしたこと、(3) 対ファシズムの様態を二項対立に陥らず把握する視点、方法論を検討したこと、にある。

(1) 本研究課題は、ピウス 11 世時代(在位: 1922~1939)の新史料を活用し、ヴァチカンから現代史を捉え直すことを目的に、計画された。第二次世界大戦前夜までの文書が 2006 年公開されたことで、各国の動向に教皇たちがどのような考えを抱き、行動したか、そして教皇聖座の動向が国際政治にどのような影響を与えたのか、明らかにできる可能性が広がった。ヴァチカン市国内部には、「ヴァチカン秘蔵文書館(旧称)」と支館「国務省外務局歴史文書館」がある。前者は教皇関連の文書や、国務長官らで組織される国務省(Segreteria di Stato)の文書が所蔵されており、教皇聖座の方針や行動、決定過程を辿ることができる。後者には、対外的な問題を扱いかつては特別教会問題聖省(Congregazione per gli affari ecclesiastici straordinari)という別組織だった部署の文書が、国・地域別に分類、所蔵されている。たとえば、各地に駐在し各国政府と実際に交渉した大使や使節の報告などを確認できる。上記二つの文書館で、地域的にはイタリアを中心に、ドイツ、日本、スペインなど、個別事例としては人種法、エチオピア戦争、スペイン内戦などに着目しながら、史料の所蔵状況を把握した。また、本研究課題採択中の 2020 年 3 月には、ピウス 12 世(在位: 1939~1958)時代の文書も公開された。大戦勃発による混乱とそれへの対応、各国と教皇聖座の関係の変化、ユダヤ人迫害を巡る問題の全容を把握できるようになり、新事実の解明が期待される。本研究課題も今後、ピウス 12 世時代の文書の調査を組み込むことで、継続、発展させられると考える。

(2) 教皇聖座の対ファシズム勢力のあり方として把握できたのは、反共産主義的な方針と、コンコルダートなどを介して得た諸特権の維持から、各国の体制との決定的な衝突を避ける姿勢である。教皇は、過度なナショナリズムに批判的であったし、各国のカトリック界がナショナリズムと結びつくことを警戒していた。そして、軍事主義的な風潮の広まりとヨーロッパを舞台にした再度の戦争を危惧していた。しかし、教皇聖座全体としては、水面下では相手国と様々な交渉を行っていたにせよ、公的な場面では外交的な表現で当事者に遠回しにくぎを刺す程度で、重要な政治問題では明確な批判を避けることが多々みられる。こうした対応と経緯が史料から露になるのは、エチオピア戦争(1935~1936)やスペイン内戦(1936~1939)という、枢軸形成の観点で決定的な出来事においてであった。この時期の教会の最上層部には、あくまで交渉を最優先する立場と対決をも辞さない厳しい姿勢を取ろうとする方針の違いが生まれていた。そして、対決姿勢を固めるピウス 11 世は孤立していったように見える。

以上のことは、エチオピア戦争の際に、ヨーロッパへの紛争拡大を避けたい思いと宣教上の利害も加わり、本来イタリアの進攻に反対であったにもかかわらず教皇が公の場面で批判しなくなった背景を明らかにした L・チェーチの研究(L. Ceci, *Il papa non deve parlare. Chiesa, fascismo e guerra d'Etiopia*, Roma-Bari, Laterza, 2010) 共産主義への対抗、宗教者への攻撃への危機感から、本来は認めていない反共十字軍という主張を許し、フランコ等が率いる反乱軍を全面的に支持しているかの印象を与えた経緯を明らかにした D・メノッツィの研究(D. Menozzi, *«Crociata». Storia di un'ideologia dalla Rivoluzione francese a Bergoglio*, Roma, Carocci Editore, 2020)でも指摘されていた。史料調査では、そうした従来の主張を再確認できたのにくわえ、イタリア内部での教皇聖座の動向も把握できた。

一例として 1938 年の出来事に着目した。同年 1 月約 3000 人のイタリアの聖職者たちがローマに集結し、ムッソリーニへの忠誠と協力を誓った。この出来事は、聖職者のファシズム支持が強固であるとの印象をイタリア国内外に与え、戦後の歴史研究でもカトリック教会の体制協力の証拠として受け止められてきた。しかし、大きなインパクトにも関わらず、集会が組織された経緯は不明なままだった。新しく公開された教皇ピウス 11 世の文書からは、集会の組織には教会側は関わっておらず、イタリアにおけるファシズムとカトリックの合同を主張するジャーナリストがカトリック教会中枢を欺く形で主導したことが明らかになった。そして、直前になって集会開催の事実を知り、中止させようとしたが、政治問題化しファシズム体制との関

係悪化することを恐れた教皇聖座は、この件を極力無視するという方針に落ち着いた。背景には、拡張主義的野心を公にし、ユダヤ人への迫害を強め、キリスト教を否定あるいはナチス的なものに作り替えようとするヒトラー政権への警戒から、ムッソリーニとカトリック国家イタリアをナチス・ドイツへの防波堤として自陣営に引き留めたいという目論見があった。しかし、その目論見はすぐに崩れ去る。ピウス 11 世とその座を継いだピウス 12 世の願いも虚しく、ムッソリーニは枢軸側での参戦を決め、ユダヤ人迫害を法制化し、ナチス・ドイツと一体化していくことになる。こうした 1939 年以降の教皇聖座と国際関係については、近年さらに新規公開されたピウス 12 世の文書の調査が必要なことから、機会を改めて取り組みたい。

(3) そもそもカトリック教会とファシズムの関係というテーマは、ファシズムとその戦禍への反省に立つ戦後世界において、「政治」「倫理」の問題から逃れ難い。実際、ユダヤ人迫害などでカトリック教会が取った行動は政治的争点であり続けている。歴史研究では固定化した政治的立場から距離を取り従来の「協力」「衝突」の二項対立を乗り越える模索が続いてきたし、本研究も歴史修正主義にも護教にも陥らず、ヴァチカンの対ファシズムの関係性を多面的に捉えようとしてきた。その方法論を検討していたところ、絶滅収容所を生き抜いたイタリアのユダヤ系作家プリーモ・レーヴィ(1919-1987)がアウシュヴィッツ内部を分析する際に用いた概念「グレーゾーン」に関心を抱いた。レーヴィは、白とも黒とも表明できない状態に人が陥る権力構造や、その力学が働く空間内部での人間の有様をグレーゾーンとして捉え、「協力者」を生み権力を維持するメカニズムを分析することで、善・悪や被害者・加害者への単純化、過去の忘却に抗おうとした。レーヴィの概念を分析し歴史研究での利用可能性を考察した論考をまとめることで、ファシズムの協力者として一括りにされた事象や組織、人物などを分析するための新視角を提示できた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 新谷崇	4. 巻 454
2. 論文標題 ヴァチカン文書館におけるピウス12世文書の新規公開をめぐって	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 地中海学会月報	6. 最初と最後の頁 7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 新谷崇	4. 巻 -
2. 論文標題 イタリアの歴史研究における「グレーゾーン」概念 議論の整理と今後の展望	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『戦時期「グレーゾーン」を架橋する 東アジア・欧州の被占領地からの視点』三菱財団人文科学研究助成報告書	6. 最初と最後の頁 43-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 新谷崇	4. 巻 32(1)
2. 論文標題 パンと祖国：ファシズムの小麦戦争	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 立命館言語文化研究	6. 最初と最後の頁 23-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34382/00013557	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Takashi ARAYA	4. 巻 10(2)
2. 論文標題 Il piu' grande evento dopo la Conciliazione: Scenari e retroscena della fedelta' dell' episcopato italiano al fascismo	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Annali della Scuola Normale Superiore di Pisa. Classe di Lettere e Filosofia	6. 最初と最後の頁 611-644
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 高綱博文、門間卓也、関智英（編）	4. 発行年 2023年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 536
3. 書名 グレーゾーンと帝国（執筆範囲：新谷崇「第二章 プリーモ・レーヴィの「グレーゾーン」について 歴史研究における概念化に向けて」21-64頁）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------